

# 「黒竜江中州並天度」(間宮林蔵)図国内所在変遷考

大野延胤

## はじめに

長崎出島のオランダ商館医員として文政6(1823)年来日したシーボルト(Philipp Franz von Siebold, 1796-1866)が文政12(1829)年までの6年間、我が国に在勤中に収集した日本関係の膨大な資料はオランダのライデン国立民族学博物館、ライデン大学図書館等に保存されている。特に最近、今まで明らかでなかったその資料の全容が、日本の研究者のオランダをはじめ資料所在の各地における熱心な調査研究の結果、次第に明らかになりつつあるのは誠に喜ばしい事である。すでにその成果は昭和63(1988)年、東京、京都、名古屋の各博物館で開催された“日本・オランダ修好380年記念”「シーボルトと日本」展や平成2(1990)年、長崎県立美術博物館で開催された“長崎出島からの旅”「ヨーロッパに眠る日本の宝、シーボルトコレクション」展において公開され、研究者はもとより、一般の人々にも大きな関心を引き起こすこととなった。両展覧会はいずれも財団法人シーボルト・カウンシルの、それぞれ「協力」と「企画」によるものであった。

両展覧会の展示品の中には「黒竜江中之州並天度」と名付けられたカラフト及び黒竜江の河口付近の地図も含まれていた。此の図は両展覧会の図録やその解説からも明らかな通り、シーボルト著「日本」に収められたカラフト図の1つと一致しており、白虹斎(最上徳内)の所蔵した間宮林蔵筆の図で、徳内からシーボルトに渡されたものであることが判明している<sup>(3)</sup>。

一方、我が国においては上記ライデン大学図書館所蔵の「黒竜江中之州並天度」図に相当する地図が「黒竜江中州並天度」の名称で北海道大学附属図

書館に所蔵されている事が指摘されている。<sup>(4)</sup>以下、前者をライデン大図、後者を北大図と略称することとし、特に北大図について、その由来等につき若干の考察を試みたいと思う。なお両図の表記上の違いは、言うまでもなく、ライデン大図にある之が北大図には無いことである。従って両図に同時に言及する場合には（之）を入れることにした。この地図名の読み方も或いは異論があるかとも思われるが、英文題目に示した様に *Kokuryū-kō Naka-su narabi ni Tendo* と読むこととする。

### 1. 文献にあらわれた「黒竜江中（之）州並天度」

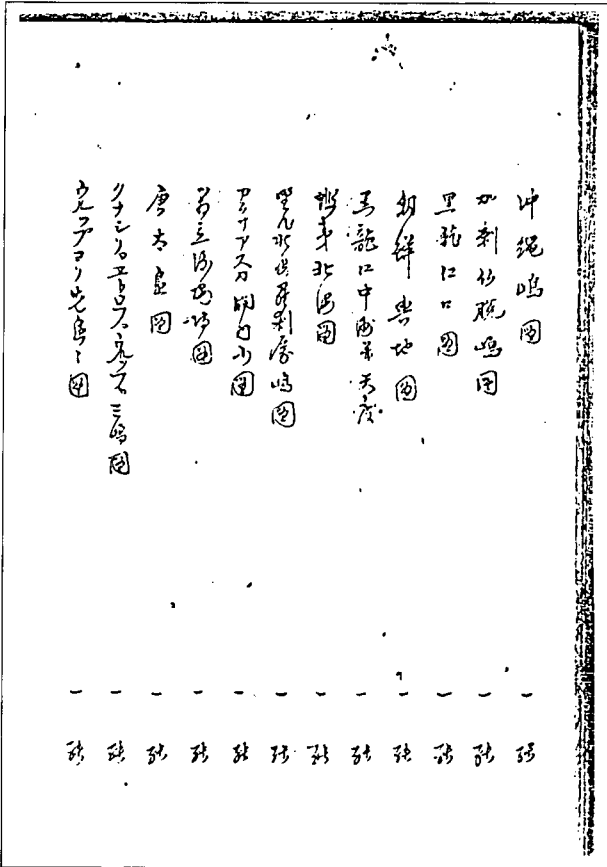
ヨーロッパにおいてはすでにライデン大図の存在が下記(1)の文献に記載されており、それは原図であることが明らかであるが、その原図が製作された我が国において(2)、(3)、のごとき「蔵書目録」や(4)の「目録」にその存在が記されていることにまず注目したい。また、これらに(5)を加え、現在5種の文献にその名が残されている。

(1) CATALOGUS LIBRORUM ET MANUSCRIPTORUM JAPONICORUM A PH. FR. DE SIEBOLD COLLECTORUM, ANNEXA ENUMERATIONE ILLORUM, QUI IN MUSEO REGIO HAGANO SERVANTUR (フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト蒐集並ニヘーグ王立博物館所蔵日本書籍及手稿目録)。表題には以下に「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著、ホフマン解説。石版刷16枚付」とラテン語で記されており、オランダ・ライデンで1845年に125部刊行されたものである。<sup>(5)</sup>この目録のNo.182に *Kok-riu-kō tsiu-siu* があり中国語訳とラテン語による解説がある。ここでは「中之州」に相当する部分を「ちゅうしゅう」と読んでいる。別に付せられたシーボルトの助手郭成章による石版刷日本文の目録ではNo.182に「黒龍江中之洲并天度 間宮氏 Ms」と記されている。以下この目録を「シーボルト蒐集書籍類目録」とする。

(2)「蔵書目録」(松本斗機蔵)<sup>(6)</sup>写本(全32丁)1巻。これは西尾市岩瀬文庫蔵である。松本斗機蔵(寛政5(1793)年—天保12(1841)年)の所蔵

した書籍地図類の目録で巻頭の部分は失われたらしく項目を欠いているが毛詩名物図説二巻に始まる13部67巻がはじめに記され、次からは項目別となり「歴史」、「子類」、「本朝実録類」、「法令制度類」、「天草実録類」、「赤穂実録類」、「白石翁著述」、「兵書類」、「政要類」、「文章」、「正文」、「和漢字書」、「和雑書」、「小説」、「雑書」、「書目」、「詩」の17項目（類別）に分けられ、巻頭からの部数369、巻数1553と14篇、3冊、15帙の目録である。この中の「本朝実録類」に大日本史卅五巻があるが、これには「天保十年四月十九日購得之直金八両」と、他には書かれていない書物購入の時と直（＝値）が記されている。この日付から、この蔵書目録は天保10年4月19日以降に、松本自身によって作成されたものと考えられる。最終の「詩」類の末尾に「壬戌六月念四日写了」とあるので、これは文久2（1862）年6月24日に原本から筆写されたものであることが判明する。原本は今までに発見されていない。この蔵書目録には上記に続いて「外国地志類」152部、248巻、「清文類」6部、58巻、「地図類」図巻4巻、図類45帳の3類が記され、その前文によって、この3類は文化10年頃に松本が最上徳内の蔵書を借りて写し、大切に保存して置いたものであることがわかる。また続いて、自分（松本）は最早四十余歳となり、実子もまだ無く、加えて平常多病であって「萬一不慮之義」もないとは云えず、その様な時に、これまで永い間大切に保存して来たこれら書物が分散してしまうことは嘆かわしいことであるので「御當家様」へ献上したい、との意が述べられている。日付けは「酉十月」、即ち天保8年10月で最上徳内の没後、ちょうど1年を経た時に当たっている。「御當家様」とは紀州徳川家である。末尾に「天保十年亥四月十七日紀伊殿江差出し御受納之上御挨拶として金拾五両御板藏之貞観政要一部被下候」とあり、写しは、「甲寅四月廿二日写了再校於花王馬埒砲鑄（？）館時壬戌六月廿六日也」、即ち安政元年（嘉永7年）4月22日に原本から写し終え、文久2年6月26日、前の「詩」類までの目録を写した2日後に再校したことになる。

この紀州家への献上本の「地図類」の中に「黒竜江中州並天度」が<sup>(8)</sup>発見される（図1、右より第5行）。この図はその前文から推して、正に最上徳内



(図 1) 松本斗機蔵「藏書目録」(西尾市岩瀬文庫蔵) 第31丁B

の所持した図から松本が写したものであると考えてよいであろう。徳内の所持した原図は文政9年オランダ商館長の江戸参府に随行したシーボルトの手に渡ったのであるから、その後、松本の写図のみが日本に残り、それは上記の様に天保10年4月紀州家へ他の書物、図類と共に献上されたのである。

(3)「藏書目録」(松本斗機蔵) 写本1冊 (全10丁), 横浜市立大学図書館蔵。これは同館の鮎澤信太郎文庫の1冊である。<sup>(9)</sup>「藏書目録」となっているが、内容は上記(2)の西尾市岩瀬文庫本のうち、紀州徳川家へ献上した部分のみの

写本である。いわば“献上書目録”であって、前文、書目、写了・再校の記述も(2)と同じである。この写本は横浜市立大学に在職された鮎澤信太郎博士の所蔵されていたもので、「鎖国時代日本人の海外知識——世界地理・西洋史に関する文献解題——」（昭和28年、乾元社）pp. 58～59に博士自身が「外国地誌蔵書目録（写）一卷一冊、天保十年（一八三九）松本斗機蔵」として「前文」を紹介されると共に、「……これによって幕末の海外地理研究資料の概観を得ることができる。その上この目録は最上徳内の蒐集していた地理に関する資料がいかなるものであったかを間接に物語って興味浅からぬものがある。」と解説されている。この「蔵書目録」に「黒竜江中州並天度」が記されていることは言うまでもない（第9丁B）。

(4)「目録」松阪市立図書館蔵1冊（全69丁）。同館郷土資料室所蔵で、明治初年に作成されたものと思われる。表紙右上に「松阪郷学所印」の角印が押されている。表題は「目録」とのみあり、「国典之部」,「図画之部」（我が国に関するもの）,「漢籍之部」,「図画之部」（外国に関するもの）に分れて書名と本数等が記されている。これら書籍は明治2年に松阪郷学所が紀州藩校の松阪学問所の蔵書を引継いだものである。この「目録」の末尾近くに「黒竜江中州並天度」1帖が記されている（図2、右より第6行）。これと前記(2), (3)に記載の「黒竜江中州並天度」とは関連があると思われる。

(5)「北海道大学附属図書館所蔵北海道関係地図・図類目録（北方地域図および日本図等も含む）」（1981、北海道大学附属図書館）北大図（写真参照）はNo. 1832に次の如く記載されている。

「1832 黒竜江中州並天度（間宮林蔵）文化7（1810）手書 彩色 80×39〔註〕カラフト全島およびアムール河口の図。内閣文庫蔵「北蝦夷島地図」に酷似す。芦田伊人氏所蔵図より模写（昭和16）。図類872」

この〔註〕によって明らかな様に、此の図は芦田伊人（明治10（1877）年—昭和35（1960）年）氏が所蔵されていた「黒竜江中州並天度」図を筆写したものである。

以上の(1)～(5)の5種の文献にあらわれた「黒竜江中（之）州並天度」図は、



(図 2) 「目録」(松阪市立図書館蔵) 第68丁A

(1)についてはすでにライデン大図がその図であることが確かめられている。一方(5)の北大図は昭和16年の筆写図であるが、その名称はもちろん、カラフト島の形状、特に北東端の特徴ある形等からもライデン大図と一致するものと考えられている。また(1)のライデン大図は(2)及び(3)の松本図(最上徳内所持の間宮林蔵筆の図を松本斗機蔵が筆写した図を仮にこう呼ぶこととする)の原図であると考えられる。とすると、松本図と(4)や(5)記載の図とは関係があるのだろうか。あるとすればどのような関係であろうか。

## 2. 松本の献上書籍地図類とその移動

「シーボルト収集書籍類目録」に記された「黒竜江中之州並天度」図（原図）の写図である松本図は、他の書籍地図類と共に紀州徳川家へ献上されたが、ここでは献上の経緯、献上後の所在地、その移動について少しく検討してみたい。

### (1) 献上の経緯

松本斗機蔵がその所蔵するおよそ二千冊の蔵書のうち、特に外国地志類、清文類、地図類の3類に限って紀州家へ献上したのは何か特別の理由があったと考えられる。

彼自身が献上書の蔵書目録「前文」に言う様に、実子が無いことや健康上の不安で愛蔵の書物の散佚を惜しんで献上するのであれば所蔵の全部を献上するはずである。彼が最上徳内との関係において自分が書写したり手に入れたりした書物や地図等に特別の愛着を持っていたことは確かであろう。彼が徳内に接したのは21、2歳の青年期であり、徳内は60歳に近く、すでに長期にわたりカラフトを含む北方地域に在勤し、その任を終えたところであった。その間の事情は献上書の蔵書目録、前文の冒頭に述べられている（参考1）。

松本是最上徳内に接した文化十年以降、恐らく文化末年と思われるが、日本曆に西曆をも加え、内外の資料を集めて、北方への外国船の来航等を編年体<sup>(10)</sup>に記した「北海鳥船記」（ほくかいうはくき）を著した。現存する写本では寛永20年から明和8年に至る記述であるが、「通航一覽」に引用された記事は文化5年にまで及んでおり、その年の松田傳十郎の加刺佛脱（カラフト）島巡視と間宮林蔵が薩哈連（サハレン）江（＝黒竜江）をさかのぼって満州の得令（テレン）に到ったことを記している（「通航一覽」巻237、刊本（大正2年国書刊行会本）第6、p. 147）。これが松本の最初の著述で、最上徳内の影響を強く受けたものと言えよう。

文政4（1821）年6月長崎のオランダ人から雄4歳、雌5歳の2頭のラクダが献上されたが、やがて見せ物として諸国を巡ることになり人々の大きな話題となった。松本はこの時「橐駝纂説」（たくださんせつ）を著してラク

ダについて考証をおこなった。<sup>(11)</sup>この本には内外の書籍が多数引用され、清文鑑からは満州語のラクダ類の説明を引用したほか、ロシヤ語やオランダ語も散見する。彼はすでに北海鳥船記著述の時から天文方の高橋景保と交渉があり、満州語もかなり学んでいたと思われる。<sup>(12)</sup>松本は最上徳内や高橋景保との関係から、直接ではなかったとしても、シーボルトと全く無縁であったとは言い切れない。景保はシーボルト事件により捕えられ文政12年2月獄死し、徳内は天保7年9月に死去する。

徳内が世を去った翌天保8年に松本は蔵書献上を決意し「目録」を作成するが、次にこの年の彼の動きについて見ることにする。

1月、正しくは「天保八年丁酉春正月」の日付で、親しかった紀州藩の儒者遠藤克輔（義斎、義学斎、白鶴義斎、士同、鶴洲、泰通、嘉永4年没、63歳）が著した「救荒便覧」続集に跋文を寄せた。<sup>(13)</sup>遠藤は天保の大飢饉の窮状を救うべく、すでに前集、後集上、下を刊行していた。前年、即ち天保7年の冬刊行された後集には岩名謙（昌山、医師）と渡辺登（崑山）とが跋を書いている。続集に跋を書いたのは松本のほか、遠藤自身と、齋藤蠡（海蔵、南冥、紀藩儒官、明教館教授）、内田恭、澤熊山（徽、伊予の儒者、神戸藩儒、名文家）であった。松本はこのうちの内田恭とも親交があった。内田は通称彌太郎（宇宙堂、観齋、五観、文化2（1805）年—明治15（1882）年）。算学に秀で、<sup>(14)</sup>高野長英の門人でもあり、長英が蛮社の獄で逮捕された後も長英の家族を援助し、長英の長女もとは内田の養女となったほどであった。<sup>(15)</sup>維新後は新政府に勤めて太陽暦への改暦に盡し、東京学士院会員となった。天保10年江川英龍の江戸湾測量巡検に随行したが、その時江川の手代齋藤左馬之輔（彌九郎）宛て、2月19日付の書簡の中で、松本は内田を「年来無二之朋友」と呼んでその随行を我が事に喜び、更に3月19日付の再度の齋藤宛て書簡でも「<sup>(17)</sup>弥太郎義何分心添宜敷奉願候」と内田への心遣いを示している。

7月19日、松本は「<sup>(18)</sup>猷芹微衷」（けんきびちゅう）の執筆にとりかかり、その草稿を8月8日に書き終え、8月12日から浄書を始めて同20日に完成し



<sup>(19)</sup>た。これは松本の主著であり、外国に匹敵する西洋型艦船を建造して海防の備えを整え、その上で英国、ロシアに交易をを許すべしと論じたが、その資料の多くは献上本から引用されている。

9月19日、藤田東湖は遠藤克輔を訪問し、松本と鶴峰戊申に出会っている。<sup>(20)</sup>「鶴峰戊申記録」<sup>(21)</sup>によると、鶴峰はこの頃しきりに奥村喜三郎<sup>(22)</sup>(城山)を訪ねているが、この日も奥村を訪ね、それから奥村と共に内田彌太郎を訪問し、その後“遠藤勝助殿白鶴義齋”を訪れ、水戸の藤田虎之助(東湖)に面会している。この日の遠藤宅への人の出入りを見ると或いは尚齒会の如き会合があったのかとも思われる。

9月20日、松本は江川英龍をその江戸役所(本所南割下水)に訪問した。<sup>(23)</sup>

9月25日、この日の日付けで「猷芹微衷」を水戸藩主徳川斉昭に献じた。

10月、蔵書中より最上徳内に関係ある書籍地図類を紀州家へ献上する決心をし、目録を作成した。

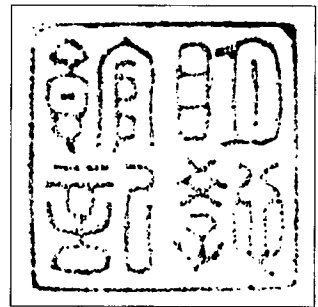
以上が天保八年における松本の行動のあらましであるが、これだけを見ると、蔵書献上の動機は彼の主著「猷芹微衷」の完成にあったかの如くである。然し彼は主著の著述終了をもって海外事情の研究を捨てたのでも、また関心を失ったわけでもなかった。翌天保9年に、モリソン号がその前年日本の漂流民を乗せて浦賀に来航して撃退されたとの情報を、恐らく遠藤克輔の主催した10月15日の同志の会合である尚齒会の席上で知った松本は、その打払いの非を論じて「上書」<sup>(24)</sup>し、その後も海防等につき意見を述べ続けているのであるから、献上書の類は手元には欠くべからざる資料であったはずである。実際に紀州家へ納入したのは前述の様に天保10年4月17日で、渡辺崋山が奉行所へ召喚されたのは翌月の5月14日であるから、蛭社の獄の約1か月前であった。海外地誌及び地図類についての献上書目を作ったのは、単に病気等一身上の理由だけではなく、時勢を憂える進歩派の同志への危難を察知していた彼がとった防衛手段の一つであったと思われる。この意味での、これら貴重な資料の散佚をかれは最も恐れたのであろう。徳内はシーボルトに禁製の地図類を渡した際、25年間の非公開を求めたのであったが、松本とも何ら

かの約束があったものかとも想像される。これら特殊な資料以外の書物は依然として彼は所蔵し続けている<sup>(25)</sup>。また献上の際、15両を下賜されるが、その2日後の4月19日には前述の通り8両を費して大日本史35巻を購入して自分の蔵書を増してさえているのである。

## (2) 献上後の所蔵地

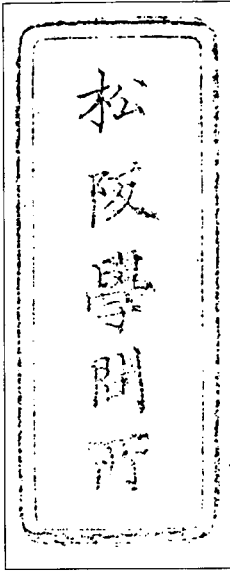
紀州家に献じられた松本の書籍や地図類は赤坂紀州邸（現在の宮内庁赤坂御用地）内に紀州徳川家の蔵書として所蔵され、後に、大正12年の関東大震災によって焼失した東京大学附属図書館の復興に際し、「南葵文庫」に含まれて紀州徳川家から東京大学へ寄贈されたかに思われる。然しそれらは東京大学には現存しない。松本の献上書類は同じ紀州赤坂藩邸内ではあったが、主屋（現在の迎賓館の辺り）とは池を隔てた反対の南の台地（青山通り側）東寄り“山屋敷”の“上ノ馬場”近くにあった藩校明教館<sup>(26)</sup>へ納められた。献上の仲介をしたのは当然、松本と親交のあった儒官、明教館の教頭遠藤克輔であったと考えるのが自然である。

松本の献上書類が明教館の所蔵となった事はその蔵書印（図3）から判明する。献上の「蔵書目録」中に、松本自身の著書「駱駝纂説」1巻が記されているが、これは正しくは「橐駝纂説」である。松本自筆本が現在大東文化大学図書館に所蔵（前川三郎（研堂）旧蔵）されている。それには「明教館記」の印が押されていてこれが献上本の中の1冊である。またそれには「松阪学問所」の印もあるがこの事については後述する。この事から松本の献上書類は紀州赤坂邸内の



（図3）「明教館記」印（大東文化大学本「橐駝纂説」より）

藩校明教館の所蔵するところとなり、それらの書籍地図類には、すべてに「明教館記」の印が押されたと見てよいであろう。明教館に所蔵されたのはあったが、それは遠藤克輔の管理下に移されたと言ってもよく、それによって紀州徳川家の庇護の下、安全にかつ、松本自身はもちろん同志の人々が関



(図4)「松阪学問所」  
印 (大東文化大学本  
「麩籾纂説」より)

覧する事も比較的容易となったと想像される。藩主の近くに所蔵された“大納戸蔵書”<sup>(27)</sup>とは性質を異にするものであったからである。松本がそれら愛蔵の書籍地図類の散佚を防ぎ、しかも以後の利用も可能にすることができたとすれば、この献上の処置は誠に彼の願いにかなった適切なものであったと思われる。

### (3) 献上書の移動

「南紀徳川史」によれば、明教館の蔵書は“戊辰江戸引拂の際”に“勢州松坂へ輸送同所学問所蔵書となし”<sup>(28)</sup>た、となっている。松本の献上書類も他の多数の書物と共に紀州藩領の松坂へ戊辰、即ち慶応4年(明治元年)に移されたのである。これら書物には江戸赤坂明教館での「明教館記」のほか、次の所蔵地である

「松阪学問所」の印(図4)が加えられた。前記「麩籾纂説」にはこれら2つの印が押されている。松阪学問所の蔵書の内容は国典の部421部、4872冊、漢学部297部7472冊等合計1152部、13903冊であったことが「松坂学問所書籍目録」にある旨「南紀徳川史」(刊本第17冊, pp. 111~112)に記されている。この内訳に海外書類319冊、清書全集はじめ6部55冊とあるが、これらは松本の献上書の冊数とかなり一致するものである。若山徳義社の所有であったというこの「松坂学問所書籍目録」はその所在が確認されないが、すでに述べた松阪市立図書館に所蔵されている「目録」が、大体においてその内容を伝えていると思われる。即ち、そこに松本の献上書のほとんど全部の書名が含まれている。「黒竜江中州並天度」は(図2)に示した通りである。

明治2年松阪学問所は松阪郷学所と改称し明治5年廃止されたが、その蔵書は「明治五年廃校の際悉く売却」<sup>(29)</sup>された。松本の献上書もこの時、松本の願いも空しく“分散”したと考えられる。

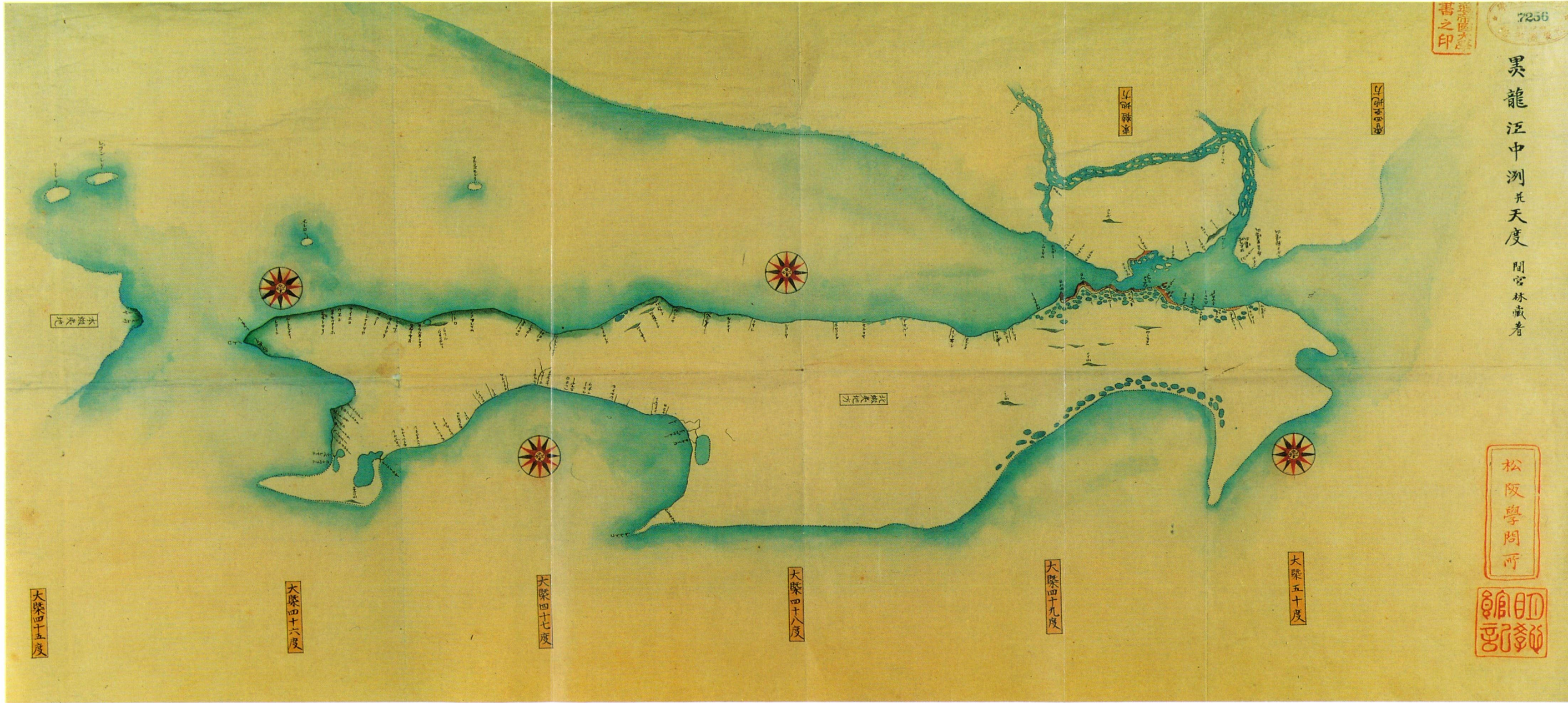
### 3. 北大図について

北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の「黒竜江中州並天度」図は、前述の様に、その「目録」の註記によって昭和16年に「芦田伊人氏所蔵図より模写」されたものであることが明らかである。この模写図には「明教館記」と「松阪学問所」の2つの印も正確に写されている。この事から、“芦田伊人氏所蔵図”にはそれら両印があったはずであり、その図は明治5年に松阪郷学所廃校の際売払われたもの、即ち、松本が最上徳内所持の図を写したものと考えてよいであろう。ただし、芦田氏の所蔵図が松本の筆写図そのものであったかどうかについては確証は無い。現在芦田伊人氏が収集された地誌地図類を多数所蔵されている明治大学の「芦田文庫」にも、松本の筆写図に相当する「黒竜江中州並天度」図は存在しない。芦田氏は昭和20年東京で戦災を受けられ、郷里福井へ疎開、23年には福井大地震に遭われ、諏訪に移られてそこで亡くなられた。その過程で失われたものも多かったと思われる。<sup>(30)</sup>松本の筆写図もその1つであったのではなかろうか。幸にして北大図には2つの印記も正確に筆写されていた事により、シーボルトが最上徳内から受取って「日本」に載せた、ライデン大図との関係も解明されるのである。

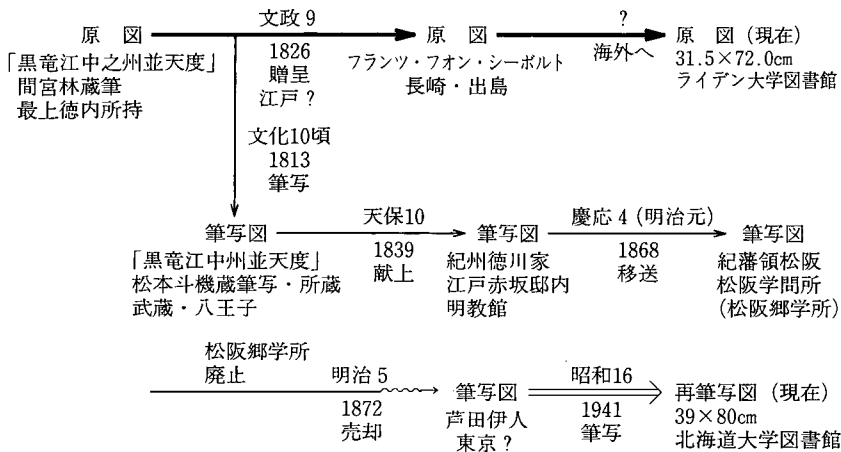
なお、ライデン大図と北大図との地形、地名等の記載における一致、類似、差異等やこれら両図と他の同類の地図について等述すべき点は多いが紙面の関係からここでは省略せざるを得ない。

最後に「黒竜江中（之）州並天度」図の所在変遷を図示してしめくくりとしたい。









## おわりに

本論を作成するにあたって北海道大学附属図書館はその所蔵される「黒竜江中州並天度」図の写真縮図を掲載する事を許可され、同時に秋月俊幸氏から種々ご教示をいただきました。厚く御礼申し上げます。また次の各図書館等からは資料の閲覧、複写、使用許可等数々の便宜をいただきました。心から御礼申し上げます。

松阪市立図書館、西尾市立図書館、西尾市岩瀬文庫、大東文化大学図書館、函館市立図書館、福井市立郷土歴史博物館、八王子市郷土資料館、北海道立文書館、福井県立図書館、長崎県立美術博物館、国立公文書館（内閣文庫）、国立国会図書館、宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所、東北大学図書館、明治大学図書館、東京大学図書館、横浜市立大学図書館、京都大学図書館、和歌山大学図書館、静嘉堂文庫、江川文庫、オー・アー・ゲー・ドイツ東洋文化研究協会(OAG)、学習院大学図書館、学習院女子短期大学図書館。

## 〈参考〉

（参考1）松本斗機蔵「蔵書目録」（西尾市岩瀬文庫蔵）所収、紀州徳川家への献上書目の「前文」

(1)  
 文政十四年之頃御勘定出役最上徳内蠟製方為御用出役八王子宿ニ旅宿罷在候ニ付  
 最寄之義ニも御座候得者度、右旅宿江罷越對話仕候處同人義天明六午年蝦夷地見分  
 御用相勤候御普請役青嶋俊藏江附添東蝦夷地嶋、込涉歴仕倭洛斯人江も應對仕其後寛  
 政之度蝦夷御開國之砌別而邊要之御用相勤候者之義に御座候得者右島、者勿論倭洛  
 斯満州等地理風土研究仕候義専ら心掛近藤重藏高嶋作左衛門杯江猶又隨從仕彼國、  
 之地理風土等詳候書籍借抄仕年來藏弄当時三百餘卷に相成候處私最早四拾余歳に  
 相成未而實子も無御座其上平常多病ニ罷在候得者萬一不慮之義有之間敷ものにも  
 無之左候得者年來丹誠を以藏弄仕置候書籍分散仕候義何共歎敷奉存候ニ付可相成  
 候義ニ御座候ハ、御當家様江右書籍地図類別紙目録之通献上仕度念願ニ御座候此段  
 御推挙之程何分宜様奉願候以上

(3)  
 酉十月

松本斗機藏

(注) (1) 文政→文化が正しい。(2) 高嶋→高橋の誤記。(3) 天保八年丁酉(1837)。

(参考2) 同上献上書目(外国地志類、清文類、地図類)のうち「地図類」の目録。松阪市立図書館蔵「目録」も参考にし表記の正確を期した。

△印を付したものは松阪学問所蔵であるが「不相分」となっているもの、

\*印は松阪所蔵ではないもの。( )内は松阪における書名または本(張)数。

大日本國郡付全図 <sup>△</sup>	四卷(二本)
倭洛斯地球図*	一帳
皇國輿地図	一帳
支那輿地図	一帳
蝦夷沿海道程図	一帳
野作全図	二帳
安房州全図	一帳
倭羅斯北海輿図	一帳
薩哈連島刺図 <sup>(注1)</sup>	一帳
薩哈連島図 <sup>(注2)</sup>	一帳
沖繩嶋図(悪鬼納嶋圖)	一帳
加刺仏脱嶋図	一帳

黒龍江口図	一帳
朝鮮輿地図	一帳
黒龍江中洲并天度	一帳
蝦夷北海図	一帳
野作北海羅刹属嶋図	一帳
カムサアスカ澗内小図*	一帳
箱立渡海場図	一帳
唐太島図	一帳
クナシリ、エトロフ、ウルップ、三嶋図	一帳
ウルップヨリ先島図	一帳
伊豆七島小図	一帳
蝦夷近傍地理畧図	一帳
倭洛斯船図	一帳 (二帳)
日光道中図	一帳
浦賀港口畧図	一帳
三国通覧図*	五帳
佛郎機銃図	一帳
満文印信写 (注3)	一帳
ヲロシヤ來函*	一帳
銅板地球図*	一帳
日本沿海形勢全図*	一帳

通計図巻四巻并図類四十五帳

(注1) 薩哈連島刺は満州語 Sahaliyan (黒色, 黒い)+Ula (河), 即ち黒竜江。

(注2) 「シーボルト収集書籍類目録」No.181に「薩哈連島之圖」がある。「ヨーロッパに眠る日本の宝, シーボルトコレクション」展の図録 (1988, 長崎県立美術博物館) p. 117, No.96はライデン大学図書館所蔵の「薩哈連島之図」を示しているが、これにある最上徳内の添書から「大坂兼葭堂」(=木村巽齋) が所持していた「清朝九邊圖」を徳内が模写したものであることがわかる。松本は「〔清〕九邊圖」を使って北海鳥船記中にカラフトの地名の考証を行なっている(「通航一覽」236, 国書刊行会本第6, p. 142) ので、シーボルトの「薩哈連島之圖」は松本の「薩哈



連島図」と同種のものと思われる。ここでも松本のものは之の字を欠いている。このほかにも徳内からシーボルトに渡された地図で「日本」に載せられたもののうち松本の「蔵書目録」に記載のものと一致するものがあるかと思われるが確証を得るに至っていない。

(注3)「満文印信写」は松阪学問所の「目録」では「清書全集、写本、三本」や「清文鑑、唐本、八帙、四十八本」などと共にまとめて記載されている。従ってこれは地図ではなく、満州語の文書であると考えられる。即ちこれは乾隆40年に三姓副都統から陶姓のハラダへあてた満文の文書で、最上徳内が写して持ち帰り、松本も訳して北海鳥船記へ載せたと同文のものと考えてよいかと思う(「通航一覽」巻236、国書刊行会本第6、pp. 142~3(注2と同條参照)。その訳文と思われる「北野作乙名所持満文書札和解、一卷」が松本の献上書の「目録」に記載されている。

## 註

- (1) ライデン大学図書館の本図は「黒龍江中之洲并天度」、また後述する北海道大学附属図書館所蔵図では「黒龍江中洲并天度」の様に表記されているが、ここでは「北海道大学附属図書館所蔵、北海道関係地図・図類目録」(昭和56(1981)年、北海道大学附属図書館編集発行)の示すところ(同書No1832)に従って両図をそれぞれ「黒竜江中之州並天度」、「黒竜江中州並天度」と常用漢字を用いて表記することとした。
- (2) 本論では「シーボルト「日本」」(昭和52(1977)年—54(1979)年、雄松堂書店)による。
- (3) 「日本」図録第1巻の付図の「〔362〕VII第25図樺太島とマンコー(アムール)河口—最上徳内と間宮林蔵の原図による」にある「MOGAMI TOKUNAI 1785」、「MOGAMI TOKUNAI 1786」、「MAMIA RINZO 1808」の3図のうち、「MAMIA RINZO 1808」を指す。  
この事は沓沢宣賢氏の「ライデンに於けるシーボルト蒐集地図について」(東海大学紀要文学部33輯、1980)の中に詳述されている。
- (4) 洞富雄、谷澤尚一編註「東韃地方紀行他」東洋文庫484(1988、平凡社)p. 258, p. 260。  
秦新二「文政十一年のスパイ合戦」(1992、文藝春秋) pp. 147~148, p. 160

ほか、等。

- (5) 本論では「シーボルト蒐集図書目録」(昭和63年, 科学書院; 昭和11年, 日本学会編輯の復刻版) 所収の同目録によった。
- (6) 通称斗機蔵, 名胤親, 号菊人。千人同心組頭。江川英龍, 渡辺華山, 藤田東湖等と親しく, 海防問題に通じていた。天保九年モリソン号事件に関して, その打払いに反対して上書したことで知られる。著書: 北海烏船記, 藁駝纂説, 献芹微衷等。天保12年9月19日没, 49歳。  
佐藤昌介「洋学史研究序説」(昭和39年, 岩波書店) 中に蚕社の一員として位置づけられている。
- (7) (参考1) 参照。
- (8) (参考2) 参照。
- (9) 「鮎澤信太郎文庫目録」(1990, 横浜市立大学図書館) p. 186。なおこの「蔵書目録」について渡辺忠胤氏の「最上徳内と松本斗機蔵」(『多摩文化』第16, 17合併号, 1965) が発表されている。また「八王子千人同心の群像」(1994, 八王子郷土資料館) 中に土井義夫氏の論文「松本斗機蔵の海外知識」の資料と共にこの目録が全巻写真版で収められている。西尾市岩瀬文庫本とはいくつかの点で違いが認められる。
- (10) 函館市立図書館, 北海道立文書館(3部), 北海道教育大学附属図書館函館分館, 東京大学附属総合図書館, 京都大学附属図書館にそれぞれ所蔵されている。「北海烏船記」はチエンバレン (B.H. Chamberlain) の「エゾ・アイヌ関係書目」(A CATALOGUE OF BOOKS RELATING TO YEZO AND THE AINOS) (東京帝国大学文科大学紀要第一, 明治20 (1887) 年〔英文〕所収) のNo231にも記録されている。
- (11) 大東文化大学附属図書館に松本自筆本が所蔵されている。このほか静嘉堂文庫本(岡本況齋手写, 手校), 東京大学附属図書館本(田中芳男旧蔵本)がある。東大本には満州語の原文の引用は無く訳文のみを載せている。
- (12) 松本が高橋景保に学んだことは, 松本の友人であった岡本況齋(保孝, 縫之助, 明治11年没, 82歳)が著した「相識人物志」(静嘉堂, 岡本況齋雑書224; 刊本は「日本芸林叢書」第5巻(昭和3年, 六合館)所収)の松本の人物評中に明らかである。また新村出「東方言語史叢考」(「新村出全集第一巻」(昭和46年, 筑摩書房)所収)の満州語学史料補遺(大正3年7月「藝文」)

および「本邦満州語学資料断片」（昭和2年6月13日稿）や最近では上原久「高橋景保の研究」（昭和52年，講談社）の中で松本の満州語について論述されている。

- (13) 「日本経済大典」第15巻（昭和43年，明治文献）所収。
- (14) 「理化学辞典」（昭和24年，岩波書店）内田五観の項。
- (15) 高野長運「高野長英伝」（昭和18年，岩波書店）p. 422。
- (16), (17) 「江川文書」中の松本斗機蔵書簡2通。仲田正之氏のご教示による。
- (18) 住田正一編「日本海防史料叢書」第4巻（昭和7年，海防史料刊行会）海防彙談巻三所収，ほか。
- (19) 著述の経過は「江川文庫」蔵の献芹微衷（写本，一冊）に記されている。
- (20) 「水戸藤田家旧蔵書類一」（昭和5年発行，49年復刻，日本書籍協会編，東京大学出版会）所収「丁酉日録」（天保八年十月）p. 260。ここに「遠藤克輔を訪ふ，松本時蔵，鶴峰彦四郎に邂逅」とある。時蔵は斗機蔵で，その時遠藤を訪ねていたと思われる。彦四郎は彦一郎（戊申）と考えられる。なお東湖はこの年4月9日に江川の手代斎藤彌九郎の訪問を受けている（丁酉日録）。
- (21) 東北大学附属図書館蔵。
- (22) 船舶用の経緯儀の考案者。天保10年の江川の江戸湾測量巡検に華山の推薦で参加したが，鳥居耀蔵の異議により帰府を余儀なくされた。松本はこのことを華山宅で奥村に会い知らされた（佐藤昌介「洋学史研究序説」pp. 261～262）。奥村の「量地弧度算法」には内田観斎（彌太郎）の序，鶴峰戊申の跋がある。また奥村の「勸施救荒」は遠藤の「廣惠編像解」からわかり易く抄出したもので“紀藩侍講義学齋遠藤通”（遠藤克輔）の跋が付せられている。
- (23) 「江川文書」中の「天保八年御参府諸用留」仲田正之氏のご教示による。これには「八王子千人同心組頭松本時蔵罷出御逢有之昼飯差出候事」とある。この3日後に華山も江川を訪問している（佐藤昌介「洋学史研究序説」pp. 214）。上記「御参府諸用留」は戸羽山瀚著「江川坦庵全集」別巻二（昭和54年，巖南堂書店）所収である。
- (24) 住田正一編「日本海防史料叢書」第三巻（昭和7年，海防史料刊行会）所収の「近時海国必読書巻之九」中，ほか。
- (25) 献上書以外の蔵書は松本死後もその子小次郎に伝えられ，国学者堀秀成は八

王子に滞在中、安政5年に入門した小次郎から「官制沿革図考」2巻、「国朝旧章録」3巻、「折たく柴」3巻を借用している。いずれも松本の「蔵書目録」（西尾市岩瀬文庫本）に見えるものである（「堀秀成日記」（自筆）学習院大学図書館蔵）

- (26) 「南紀徳川史」（昭和47年，名著出版，復刻版）第17冊，pp. 87～112。明教館の位置は静嘉堂文庫蔵「紀州赤坂館地区」に記され，また宮内庁書陵部蔵「旧紀州邸絵図」には“学校”として確認できる。
- (27) 「南紀徳川史」第17冊，p. 101。なお，東京大学図書館蔵「大納戸御書目録」（1冊），「徳川家（紀伊）御蔵書目録」（5冊）等は紀州藩主の身近にあった書物の目録である。
- (28) 「南紀徳川史」第17冊，p. 102。
- (29) 同上，p. 111。なお松阪市立図書館の「目録」に書名があり，現在学習院大学図書館に所蔵されている「伴大納言絵巻」三冊，「福富草紙」二冊には紀伊国古学館の印に加えて松阪学問所の印も押されている。これらは松阪郷学所廃止の際に売却されたものの一部と考えられる。
- (30) 「歴史地理」第90巻第1号（昭和36年6月，日本歴史地理学会編，吉川弘文館）所収「蘆田伊人氏追悼録」，「若越郷土研究」第五巻4号（昭和35年8月，福井県郷土誌懇談会）芦田伊人氏の“追悼号”等による。

（おおの のぶたね 本学兼任講師）